

# 感動!! 「風に立つライオン」 映画を鑑賞

(上) 会員 荒田 悠

東日本大震災の傷跡の生々しい風景の中に一人の黒人が足を引かず歩いてくる姿が少しずつ画面に広がってくる。雨まじりの小雪が舞い散る寒々とした中でミケランジェロ・コイチロ・ンドゥング医師。医師が呆然と見渡すシーンから始まった。

「航一郎・やっとあなたの故郷へ来たよ」「和歌子の国の人はみんな温かい人たちだ」と黒人医師はつぶやいた。アフリカでの僻地医療・巡回医療に青春を懸ける青年外科医の物語(小説を映画化)。

母国日本に恋人を残しケニアのナクルにある熱帯学研究所の中に診療所があった。又、「国境なき医師団」と共に活躍する。映画の主人公、外科医島田航一郎は赤十字病院より派遣要請で赴任してきてさまざまな体験をする。内戦で怪我をした黒人兵士がトラックでどんどん運び込まれてくるなかで、航一郎は手早く上手に手術をこなしていく姿を見た同僚医師たちは「よー・吉野屋!」と叫ぶ。当時日本では、CMで早いウマイ安いが流行っていた。

航一郎にとって、彼の心には国境とか、人種差別とは完全に無縁であり、患者に誠実であった。「ダイジョウブ!」、ダイジョウブ!、ダイジョウブ!と底抜けに明るく笑顔で心身に傷つ

た兵士たちを癒やすのだった。—— 観客の私にも伝わってくる—— 寝る前、真っ黒い地平線に向かって一人立ち大声で叫んでいる航一郎「ガンバレ!ガンバレ」と。朝早く太陽の赤い前、美しい空を岩の上に座って太陽の光を待っているところに院長がやって

くる。「先生、素晴らしいですから太陽が出るのを見ませんか」と航一郎は言いつつ、やがて太陽が地平線上に表れる。「俺、ライオンが好きなんです。群れから離れたライオンって……すごく厳しいんです」と院長に話す。南スーダンの内戦が激しくなり、航一郎はロキチヨキオ病院へ移った。その病院で和歌子(石原さとみ)と出会う。22歳の看護師。彼女は以前インドのマザーテレサの終末病院

「死を待つ人々の家」の医局で働いた経験を持つ、ズボンの似合う笑顔の可愛い女性。ある日、航一郎を震えさす出来事があった。子どもばかり数人の怪我人が国境辺りからトラックにて搬送されて来た。子供たちは地雷によつて足を損傷している。片足を失うほどの大怪我である。無情にも子どもたちは地雷の実験動物のように兵士たちの前を一行になって歩

かされて20人は死んでしまったと言った。子どもたちの恐怖心を少なくするため麻薬を腕に打たれていた。そんな中に一人だけ怪我の様子も違わぬ子どもがいた。その子も瀕死の状態であった。その子がいきなり航一郎の腕をかじってはなさない。周りの医師が押さえつけたが、「ダイジョウブ、ダイジョウブ」と航一郎は笑顔で次の言葉を少し考えていたが、「安心してろ!!ここは病院だ。敵じゃない!!」

と言いつつ、子どもはやっとなら腕を吐き出し、航一郎をにらみつけた。腕から血が流れた。その子どもは、航一郎の名前を聞いて、12歳になったばかり、冷えきった悲しい目を見た航一郎は心が痛く感じるのだった。

(つづく)

## 編集後記

平成27年8月2日の過去のお天気を調べると、平成26年・曇り晴、平成25年・曇り、平成24年・曇りです。雨が無いので、神頼みで、「臨床研修医第2回北見での思い出づくりの集い」の開催をこの日に決めて準備を始めました。平成27年7月28日の天気予報が「曇り」です。雨にはならないと最終開催決定を役員会で承認しました。

そして当日、快晴、気温30度のお天気に恵まれ、臨床研修医の先生方の若い笑顔に出合いとても嬉しく思っています。ご参加を戴いた北見赤十字病院の皆さん、北見フォークダンス協会の皆さん、ありがとうございました。当会スタッフの皆さん、お疲れさまでした。

(逢坂)



2015「風に立つライオン」製作委員会 出典: [https://www.toho.co.jp/movie/lineup/kaze\\_lion.html](https://www.toho.co.jp/movie/lineup/kaze_lion.html)